

空手道詳説（43）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その7、琉球の言語と文化）

（2）空手と沖縄の言語

ア 空手と沖縄語

1) 形（型）の名称考と沖縄訛り

◎ 沖縄訛りによる呼称の変化

- ・ シソーチン・・・当て字で「四向戦」や「四向鎮」を使用している。福州武術の套路に「蟋蟀戦」というのがあり、蟋蟀は「コオロギ」である。福州語で、「蟋蟀戦」のことを「シサウチン」と読むので、沖縄では訛って「シソーチン」になった。何故「コオロギ」が武術の対象かと不思議に思うだろうが、福建地方の風習に「コオロギ」を闘争させて楽しむ娯楽があり、その闘いの行動からヒントを得て考案されたた套路が「蟋蟀戦」であった。古い時代の沖縄でも、子供たちが「コオロギ」遊びをしていたという。

「シソーチン」と「シサウチン」では大した発音の違いはないと思われるだろうが、それぞれの国で発音するのを耳で聞けば、大きな違いとなるはず。以下の型の場合でも、同様に考えて頂きたい。

註：套路とは、中国武術の型である。

- ・ サイハー～この型があるのは剛柔流のみで、当て字で「最破」とか「碎破」などの字を使用している。福州武術の套路に「獅法」というのがあって、発音は「サイファ」であった。獅子拳法は南宋時代（1127～1279年）に福建省永泰県で発生し、清代初期に福州に伝わったもので、この「獅法」の福州語読み「サイファ」が剛柔流の型「サイハー」になった。

なお、沖縄では獅子のことを「シーサー」と呼び、「シ

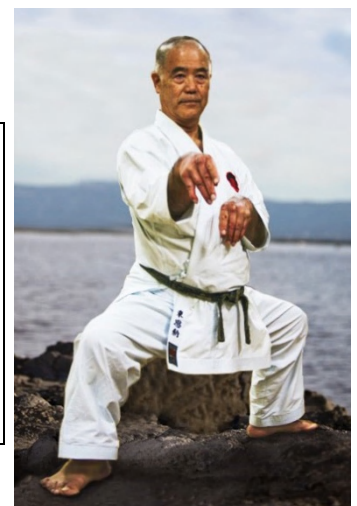


一サー」の像は建物の門や屋根、村落の高台などに魔除けとして据えられているのを頻繁に見かける。この呼び方は、獅子の泉州語「サイシー」の逆読みであると金城氏は記している。

- ・ セイエンチン・・・東恩納寛量が伝えた剛柔流の型で、当て字で「征遠鎮」、「征引鎮」、「征遠戦」と書かれるが、この型は鷹の闘争や諸動作を取り入れて編み出された套路の「青鷹戦」のことである。「青鷹戦」の福建語読みは「チェイイチン」となり、それが沖縄訛りとなり「セイエンチン」となった。言われてみれば確かに頷ける場所があって、最初の両手を広げた所作は、鷹が大きな翼を広げて相手を威嚇しているかの如く、中ほどの「掛手受け」は鷹が爪で獲物を掴む動作、最後の「諸手繰り受け」も、戦い終わった鷹が翼の納める動作に通じると見ていいだろう。
- ・ クルルンファ・・・福州語で龍のことを「ルン」と言う。即ち「クルルンファ」の「ルンファ」は「龍法」であって、その前に「臥」が付いた套路「臥龍法」であると判明した。それを福州方言で読ませたところ「ゴールンファ」となる。沖縄伝来後に沖縄訛りで「グールンファ」となり、更に濁音が清音に変化する傾向から「クルルンファ」となったのだろう。
- ・ スーパーリンペー～現在「スーパーリンペー」（一百零八歩）と呼ばれる套路は、福州と泉州などに分布している。「スーパーリンペー」という発音は、福州語の「ソバーリンパイ」と、永春方言（泉州語）の「チバーリンペー」の呼称が混じり合って変化し、今の空手界に広まっている。沖縄語の語音変化（三母音が主となる）からセがシに、ソがスに変化する傾向があることから、「ソバ」が「スパ」になり、「チバー」が「スーパー」になり、「リンパイ」のところは泉州語の「リンペー」を借りている。因みに、沖縄方言の母音変化は、筆者が（1）「沖縄の言語」のところで詳しく記述している。更に、この型について金城氏は、

福建省には二、三の流派に同名の型があり、それは流派の技法を全て包含した総合型の意味を持ち、技法は百八種の技法を含むものである。剛柔流空手道の「一百零八歩」は手数が三十六種類あるのみで、一段だけであり、残りの二段、三段が伝わっていなく不完全な型となっている。

と述べているから、元来「スーパーリンペー」は初段から三段までであったことになる。右の写真は、剛柔流・東恩納盛男氏の「スーパーリンペー」である。



次いでもう一つ、「スーパーリンペー」の別名として「ベッチューリン」（百歩連）がある。金城氏は、「百歩連」ではなく「百技連」が正字だとしている。福州語で「百歩連」は「パーブーリン」、「百技連」は「パーギーリン」と呼び、この二つの意味は同じで、百個の技法の連続という意味になる。「パーギーリン」から「ベッチューリン」に変わったのは、琉球方言の語音変化によるもので、「パーギーリン」から「パーヂーリン」となり、更に変化して「ベッチューリン」になったのだと考察している。

なお、往々にしてあることだが、型を保存していた人がその型を教えなかったり、伝えないまま亡くなった場合、その型は消滅する。これを「失伝」と言う。

- ・ ナイハンチ～発音からの当て字で「内歩進」と書かれている。台湾伝来の鶴拳法の套路に「内膝」という套路があつて、これを「ナイセン」と発音する。福州語では「内膝」の読みは「ノーハンチ」であつた。この台湾鶴拳法の套路が沖縄に伝わり、福州語読み「ノーハンチ」が沖縄訛りとなって「ナイハンチ」となったものであろう。この型は「内膝」の名の示す通り、内股立ちの横歩きと、内足払いが特徴になっている。
- ・ パッサイ～「バツサイ」と発音しているところもあつて、「拔塞」「拔砦」などの当て字で記され、型は大・小二つ伝わる。試合や演武会で使われることが多く、よく知られた型といえる。金城氏は、明代初期に少林寺の「少林五拳」や「福建南拳」には架空神獣の龍や鳥獣に象られた型の名称が多いと考察している。パッサイの第一動作は豹拳の特徴を持ち、他に獅子拳が含まれることから、「パッサイ」は「豹獅戦」でないかとしている。福州語で豹は「パーッ」、泉州語は「パウ」となり、「獅」は福州語も泉州語も共に「サイ」と呼ぶ。そこで「豹獅」を福州語で「パーッサイ」、泉州語では「パウサイ」となる。これらが沖縄訛りになって「パッサイ」になった。
- ・ チントー～「鎮斗」、「鎮東」などの当て字で記されている。チントーは、福建省安南県の人から泊の松茂良興作に伝授されたと伝えられ、泊手、首里手を代表する型である。この型の出自は、福建省の南少林五祖拳の套路「沈頭」で、読みは「チントウ」である。その特徴は、体を低くし頭部を防ぐ動作があつて名付けられたという。その套路の発音「チントウ」が「チントー」になった。

五祖拳には五十余りの套路があつて、その中で「チントウ」は優れた型の一つに相違ないが、最強の套路ではなく、更に至難で高度な技法を持つ套路が数々あるといわれている。

- ・ ローハイ～「鷲牌」などの当て字で書かれている。しかし語源は羅漢拳の「羅漢」で、福州語で「ローハン」と発音する。これが沖縄訛りに変わり「ローハイ」となった。羅漢とは、古代インド語で「釈迦の仏弟子のうち高位にある者」を表す言葉で漢語訳「阿羅漢」が正規で、通常は略して「羅漢」と呼んでいる。日本でも、十六羅漢や五百羅漢の彫像などよく知られた存在である。

羅漢拳は正しくは少林羅漢拳で、南北少林寺の代表的な拳法である。後に少林寺を出て民間に伝播し福建武術の代表流派となり、更にこの羅漢拳が沖縄に伝来し、「ローハン」が「ローハイ」となった。

【補注：筆者は「ローハイ」の型は三種伝わったと思う。糸洲流三世宗家・坂上隆祥著「空手道型大観」（1978年10月初版、発行者・坂上節明）に写真入りで「ローハイ」初段から三段までが解説付きで掲載されている。】

金城昭夫氏の著作から幾つか選んで掲載したが、お気づきと思うが、そのほとんどが南派少林拳である。とすれば、これら型の伝来は時代的にそんなに古いものでないことを意味していないだろうか。

しかし、1683年に冊封正使として琉球を訪れた汪輯が「ワンシュウ」の型を伝えたとか、1762年に書かれた「大島筆記」に登場する公相君（1756年来琉か？）が「クーシャンクー」の型を伝え残したなどの口碑があるので、次にこれらを述べる。

（この項、つづく）

参考文献等

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行
- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造

- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成19年6月20日初版、祥伝社発行
- ・ 金城昭男著「空手伝真録」、初版平成11年7月10日、沖縄図書センター発行
- ・ 埴原和郎著「日本人の骨とルーツ」、初版平成9年9月30日、角川書店発行
- ・ 瀬川拓郎著「アイヌ学入門」、初版2015年2月20日、(株)講談社発行
- ・ 服部四郎著「日本語の系統」、初版1999年3月16日、(株)岩波書店発行
- ・ 安本美典著「日本語の起源を探る」、初版1990年10月5日、(株)徳間書店発行
- ・ 河出書房新社編集部編「日本語の起源を探る」、初版2003年5月10日、河出書房新社発行
- ・ 長嶺将真著「沖縄の空手・角力名人伝」、昭和61年6月10日初版、(株)新報出版発行
- ・ 沖縄県教育委員会文化課編「空手道・古武道基本調査報告書—II」（平成7年3月第一刷、榕樹社発行）
- ・ 坂上隆祥著「空手道型大観」、1978年10月10日初版、発行者・坂上節明